

環境対応で再評価されるハイブリッド車

◆VWは新型「ゴルフ」にマイルドハイブリッドを搭載

2019年5月、VWは10月に発売する新型「ゴルフ」に、ガソリンエンジンに48Vのリチウムイオン電池を組み合わせるマイルドハイブリッドシステムを採用すると発表した。発進時などに電気でトルクを増加させ、エンジンの負荷を低減することで燃費を向上させる。このマイルドハイブリッドシステムにより、新型「ゴルフ」は現行型に比べて燃費が8%改善する。

日本でハイブリッドとして知名度が高いのは、低速時には電気、高速時にはガソリンで走るストロングハイブリッドであり、トヨタの「プリウス」などが採用している。また日産の「ノートe-POWER」は、電気で走行し、ガソリンエンジンは電池に充電するためだけに機能するシリーズハイブリッドを採用している。

マイルドハイブリッドは、電池容量が小さいため電気のみでの走行は不可、もしくは可能であっても走行距離は短く、ストロングハイブリッドやシリーズハイブリッドに比べると燃費改善効果は大きくはない。一方、複雑なシステムは不要で、比較的 low コストで燃費が改善できるメリットがある。

◆中国の規制改定やトヨタの特許開放などでハイブリッド車の普及が進むか

EUでは、1km当たりのCO₂排出量を21年には15年比で3割改善する必要があるなど自動車の環境規制が強化されている。欧州の自動車メーカーは、環境対策として燃費の良いディーゼル車を推進してきた。しかし最近では、ダイムラーが18年に発売した「ベンツSクラス」でもマイルドハイブリッドが搭載されるなど、燃費改善のためにマイルドハイブリッドの採用が広がりつつある。

ハイブリッド車普及を後押しするような動きもある。中国は、自動車メーカーに環境車の生産を一定割合義務付ける「NEV規制」において、ハイブリッド車を環境車に含め、普及の支援を検討している。またトヨタは、4月にハイブリッド関連の特許を無償開放した。環境車の本命とされる電気自動車は、充電インフラや航続距離、価格など普及に向けた課題が多く、当面の現実的な環境対策として、ハイブリッド車の普及が世界的に進むかもしれない。 【今村弘史】